

国語、地歴・公民

充実が求められている 言語活動を授業に どう取り入れるか

新課程では、生徒の思考力、判断力、表現力などを育む観点から、基礎的な知識・技能の活用を図る活動と共に、言語活動の充実が求められている。しかし、時間的制約がある中で、受験指導とのバランスを図りながら、どのように行えばよいのかという課題があるのが現状だ。今号では、国語、地歴・公民において言語活動をどのように取り入れているのか、2校に現状と今後の方針を聞いた。

Q. 国語、地歴・公民における新課程指導上の課題は何ですか

国語

- 国語における言語の指導とは別に、学校全体で取り組む言語活動の中核教科として、国語がどうかかわっていけばよいのか。(埼玉県)
- 言語活動の要として国語に対する期待は大きいものの、限られた単位数や各学校の制約の中で実践するのはかなりの工夫が必要。それこそが教師の醍醐味だと思うものの、漠然とし過ぎている上、他教

科でも言語活動を行おうとすると、どう調整するのが新たな課題になると感じている。(三重県)

地歴・公民

- アクティブ・ラーニングを授業に取り入れてみたいが、先行事例が少なく、まだ踏み込めていない。特に、「日本史B」で知識伝達と内容進化の両立をいかに図るかが大きな課題。(静岡県)

- 言語活動をどのように充実させていくか、そして、それに伴い、どのように評価を変えていくかが課題である。(和歌山県)
- 歴史を考える視点や解釈する力を付けるために必要な歴史事項の説明などの論述指導を、通常の指導に加えてどこまで取り組むかが、現在の課題である。(兵庫県)
- 地歴・公民で言語活動を行うとなると、受験指導とのバランスが難しい。(静岡県)

出典/『VIEW21』高校版読者モニターへのアンケート結果より。アンケートは2013年6月にウェブとファクスで実施。有効回答数は64

国語 学校事例

神戸大学附属中等教育学校

読む、書く、話す、聞くなど

言語活動を総合的に取り入れ
表現力や思考力を鍛える

言語活動の充実に
学校全体で取り組む

神戸大学附属中等教育学校は、神戸大学発達科学部附属中学校を再編して2009年に開校した。13年度現在、1期生は高校に当たる後期課程（4～6年生）の5年生（高校2年生）という新しい学校だ。

同校では、「国際的視野を持ち未来を切り拓くグローバルキャリア人の育成」を教育目標に掲げて、「見つける力」「調べる力」「まとめる力」「発表する力」の4つの力の育成を、全教科の研究主題として授業改善に取り組んでいる。

目標実現のための土台となるの

が、同校が発達科学部附属中学校時代から40年以上にわたって力を入れてきた言語活動だ。同校では、中学校に当たる前期課程を中心に、テーマ学習として聞き方・話し方の訓練の時間を設けている他、全教科で言語活動を行っている。

例えば、50年近く続く「小集団学習」は、4人1組のグループで行う学び合い活動だ。司会、発表、計時などの役割をそれぞれ分担し、必ず生徒全員が活動に参加するのが特徴。また、「リーダー学習」は、生徒がローテーションでリーダーを務め、毎時間の授業の冒頭5分間で、教師に代わって、前の時間に行った授業の復習や、その日に学習する内

容を紹介したり、問題演習の指導を行ったりする。進路指導部長の高木優^{よし}先生は、そうした言語活動について次のように説明する。「国語科が牽引役となって、他教科の学びに必要な表現力や言語力の基礎を培うのが通常の言語活動のイメージだと思いますが、本校では、前期課程で学んだ言語技術が全ての授業の土台となっているのが特徴です」

前期課程から発表や話し合い活動を経験しているため、生徒は後期課程においても授業で活発に発言し、長い文章もいとわずに書く。東京大の入試問題のような思考力を要する難しい課題にも意欲的に取り組むという。

各教科では、そうした生徒の特徴や気質を生かして、効果的に言語活動を組み入れている。地歴・公民担当の水嶋正稔^{まさとし}先生は、「講義一辺倒の授業ではなく、生徒が考えたり話し合ったりする時間を多く取っている」と語る。図表をふんだんに用いた独自のワークシートを活用し、随時、小集団学習を取り入れながら、



神戸大学附属中等教育学校
高木 優
たかぎ・よし
進路指導部長。地歴・公民担当。



神戸大学附属中等教育学校
岸本知之
きしもと・ともゆき
第4学年主任。国語担当。



神戸大学附属中等教育学校
水嶋正稔
みずしほ・まさとし
第5学年主任。地歴・公民担当。



神戸大学附属中等教育学校
中垣篤志
なかがき・あつし
理科主任。化学・生物担当。



神戸大学附属中等教育学校
平松はるみ
ひらまつ・はるみ
第5学年担任。国語担当。

神戸大学附属中等教育学校

◎2009年度、神戸大学発達科学部の旧附属明石中学校・住吉中学校を母体として、中等教育学校として発足。12年度、後期課程（高校）が開設された。小集団学習や総合学習「Kobeプロジェクト」など、言語活動を重視した特徴的な教育を展開する。

- ◎全日制／普通科／共学
- ◎1学年約145人
- ◎2013年度入試合格実績／なし（1期生の卒業は2015年3月）

個人が考える時間、考えたことをグループやクラス全体で共有する時間などを設けている。

理科では、実験後に必ずグループで結果を考察する時間を設けたり、みんなで問題を解き合う時間を設けたりしている。理科主任の中垣篤志先生は、「前期課程で表現力や言語力を鍛えている分、生徒は意欲的に取り組んでくれます。後期課程では生徒の意欲を維持・向上させつつ、入試にも必要な高度な内容に発展させていくことを意識しています」と語る。

「総合単元学習」で幅広い表現力の育成を目指す

国語では、全ての学年で、同校独自の言語活動「総合単元学習」を取り入れている。1970年代から続く伝統的な取り組みで、毎年2つの学年で実施する（13年度は3学年と4学年が行う予定）。教師が独自に単元をつくり、教科書はもちろん、書籍や資料など教科書以外の教材も駆使しながら、「読む・書く・話す・聞く・見る・調べる・考える」力を総合的に育成する取り組みである。

「総合単元学習」に充てられる授業時間数は、担当教師によって異なる。発表前の数時間を利用して集中的に行う場合もあれば、十数時間をかけて行う場合もある。現5学年担任の平松はるみ先生は、12年度4学年の2～3学期で「学校づくりプレゼンテーション」をテーマとする「総合単元学習」を実施した。

授業での学びが実生活を変えることを実感

平松先生が実施した「総合単元学習」の流れは、次の通りだ。

- ① 4学年の生徒全員に、同校の学習や施設、行事、部活動、コミュニケーション、知名度など、学校の現状と課題に関するアンケートを実施。
- ② 元記者を招いた講演会を行い、インタビューの方法を学んだ上で、同校の教職員にインタビューをし、先のアンケートと併せて、生徒・教職員が感じている学校の課題を把握。
- ③ 自分が抱える問題にアプローチする

図1 「総合単元学習」の評価基準

時	主題	お ね が い	評価の観点
		・4月～12月までのふり返り 1. 学校の問題についての意識調査 2. 自分が解決したい問題についての意識調査 3. 自分が考える問題解決案についての調査 4. 学校のよさについての意識調査 5. 問題や解決法に関する学習材調査	① ② ③ ④
1次 1時	課題発見	・学校の問題についての意識調査表を見て、問題を列挙できる。 ・問題について話し合い、分類することができる。 ・自分が抱えたい問題を発見することができる。	① ② ③ ④
冬休み 課題	冬休み課題 調査	・自分が担当する問題に関する本を探ることができる。 ・本を読み、読書記録を書き、提出することができる。	Ⅰ Ⅱ Ⅲ Ⅳ Ⅴ
12次 1～3時	評論 「隠れたカリキュラム」	・評論を読み、言語についての知識を高め、内容を理解することができる。 ・自分が担当する問題に関連づけることができる。 ・マインドマップの書き方を知り、語の関連を意識することができる。	Ⅰ Ⅱ Ⅲ Ⅳ Ⅴ
13次 1・2時	講演を聴く	・講演を聴いて、インタビューの仕方を理解することができる。 ・副校長にインタビューし、マインドマップで記録することができる。	Ⅰ Ⅱ Ⅲ Ⅳ Ⅴ
休み 時間	職員にインタビューする	・グループ内で各自がどの職員にインタビューするかを話し合うことができる。 ・インタビュー内容を考え、職員が持つ問題を探したり、マインドマップで記録することができる。	① ② ③ ④ ⑤
3時	話し合い	・生徒の問題と職員の問題を整理し、分類することができる。 ・問題解決に向けて、各自が読んだ本の内容を説明することができる。 ・問題解決に向けて話し合うことができる。 ・情報を共有し、新しい提案を考えることができる。	① ② ③ ④
14次 1～4時	プレゼン準備	・プレゼンの方法を知る。 ・グループでプレゼンの方法を選択し、構成し、分組することができる。 ・分組した内容をまとめることができる。	① ② ③ ④ ⑤
5・6時	プレゼン発表 (干渉)	・グループでプレゼンテーションを行うことができる。 ・質疑応答ができる。	① ② ③ ④ ⑤
7時	プレゼン発表 (本戦)	・グループでプレゼンテーションを行うことができる。 ・質疑応答ができる。 ・評価することができる。 ・ふり返りを行う。	① ② ③ ④ ⑤
	事後評価	1. 現状から課題を発見し、意識できたか。 2. 課題解決に向け、必要な本や情報を収集し活用できたか。 3. 話し合いに積極的に参加し、発表の準備ができたか。 4. 話し合いや発表内容を、文章や図表を用いてまとめることができたか。 5. 学習内容を関連させ、統合することができたか。	Ⅰ Ⅱ Ⅲ Ⅳ Ⅴ

*学校資料をそのまま掲載

- ④ 同単元のメインテキストである荻谷剛彦(たけひこ)オックスフォード大教授の評論「隠れたカリキュラム」を読む。男女の区別や年齢による区別など、当たり前と思われていることに疑問を持つ必要性を学び、読解力と批判的思考力を養う。
 - ⑤ グループごとに、学校の課題の設定と解決法をまとめてプレゼンテーションを行う。
- この一連の過程に、「読む・書く・話す・聞く」の各技能の他、質問する力やデータ分析力、情報収集力など、言語・表現力に必要なあらゆる技能・能力が盛り込まれている。「12年度の4学年は中等教育学校の1期生なので、自分たちで学校をつくっていききたいという思いが強くなります。『総合単元学習』で提案した行事の改革案を、今年度の文化祭での改善に結び付けた生徒もいます。授業で学んだことが自分たちの

生活を変えていくという実感が持てるのも『総合単元学習』の魅力です」と、平松先生は話す。

取り組みの評価は、「関心・意欲・態度」「書くこと」「読むこと」など5つの観点について、それぞれの取り組みに応じて評価基準を明確にしている他(図1)、最後に評価シートを書かせて自己評価・他者評価による「ふり返り」を行う。

古文や漢文でも 作品解釈の話し合いを行う

古文や漢文においても、言語活動を授業に取り入れている。講義形式になりがちな文法や句法などの知識事項の解説は作品の読解と共に行い、学んだ文法や句法などについては、覚えているかどうかを口頭で確認する活動を行う。同時代の別の作品との比較などを生徒同士で話し合わせながら行うことで、作品解釈の幅を広げる活動もあるという。

「総合単元学習」を始めとする言語活動は、大学入試に必要な力の育成という観点でも有益であると平松先生は強調する。

「読み、書きの指導をする際、入

試にも通用する力になっていくかどうかを教師が意識しさえすれば、一般入試に対応できる力は十分に身に付くと思います。発表やプレゼンテーションの時間は数時間ですが、それでもAO入試や推薦入試の面接につながる可能性を考えれば、大きなプラスになるでしょう」

今後の課題は、生徒の学力幅への対応である。13年度に県立高校から赴任した国語科の岸本知之先生は次のように述べる。

「本校の生徒は、授業を受ける姿勢やプレゼンテーション能力、考える力など、学習意欲や学習能力は平均的な高校生より高い反面、帰国子女が多いということもあり、漢字などの基礎知識や文章力が身に付いていない生徒も少なくありません。現在、大学入試を見据えて、漢字や語彙のドリル学習などを行い、基礎学力の向上に着手しているところですが、前期課程で養った生徒の意欲や好奇心を維持・向上させつつ、入試学力の土台をいかに築いていくのを考えてながら、今後も授業改善を重ねていきたいと思っています」

地歴・公民 学校事例

長崎県立佐世保北高校

アクティブ・ラーニングで

学習内容を効果的に定着させ、

主体的な学びの意欲を引き出す

アクティブ・ラーニングの 導入を地歴科全体で進める

長崎県立佐世保北高校の地理歴史科では、言語活動の充実を図るため、「アクティブ・ラーニング」の導入を進めている。アクティブ・ラーニングは、教師による一方向的な講義形式の授業ではなく、グループワークやディスカッションなど生徒の能動的な学習への参加を取り入れた授業法のこと。新課程への対応をテーマにした10年経験者研修参加をきっかけに、世界史担当の朝長千恵先生が6月の研究授業で初めて行った。

「資料の読解などにかかわる主題を設定して、言語活動の充実を図る

ことが6月の研究授業のテーマでした。具体的には、『アメリカ横断鉄道の敷設を新聞記者の目線でレポートする』という設定で、鉄道敷設に関する2つの資料写真を見せた上で、当時の社会状況、人々の考えを読み取る活動を行いました(朝長先生)

横断鉄道開業を喜ぶ白人たちのみを写した写真と、敷設作業に従事する中国人労働者を写した写真を見て、それぞれの写真が、どのような新聞購読層に向けて、何を伝えようとしたのかなどを議論させたところ、教師の予想以上に生徒たちは議論に熱中したと、教科主任で日本史担当の溝上貴稔先生は話す。

「新課程を迎えての朝長先生のアクティブ・ラーニングの授業は、地理歴史科全体の指導改革の起爆剤になったと思います。今は、ICTの利用も含めた言語活動の充実を図るため、アクティブ・ラーニングの研究授業を定期的に行いながら新しい指導法を模索している段階です」

言語活動は、他者と協同して課題を解決する力を育む

6月の研究授業を踏まえて、朝長先生は2学期から、2年生の世界史の授業をアクティブ・ラーニング中



朝長先生の世界史の授業でのグループワークの様子

心の授業形態へと切り替えた。授業の大まかな流れは、最初の20分間で板書と説明を行い、残りの30分間は生徒がグループになってプリントの問題を解いていくというものだ。

「今までの授業では、分からないところがあっても定期考査の前に復習すればよいと考える生徒もいたと思います。しかし、グループワーク中心の授業では、授業時間内に友だちと解決しなければなりません。つまり、目指しているのは、主体的な学びが必要な授業の仕組みであり、それによって深い理解や定着が図れると期待しています」(朝長先生)

生徒には、グループワーク中の立ち歩きも認められている。グループ内で話し合っても分からないことは、他のグループに聞いて解決するためだが、最初のうちは、生徒たちはなかなか動こうとしなかったという。

「自分一人で考えることに慣れていない生徒に、他の人に聞いてでも問題を解決しようという意識を醸成することも、この授業の目的の1つです。社会では、周囲とコミュニケーションを取りながら、問題を解決す

る力が必要です。他者と協同する力を身に付けられるのがアクティブ・ラーニングであり、言語活動なのだと思います。今まで動かなかった生徒がずっと立ち上がり、他のグループに足を運ぶ瞬間は感動的です」(朝長先生)

アクティブ・ラーニング中心の授業に変えてから、世界史に対して自信を失っていた生徒が、グループの中で答えを導き出そうと生き生きとした様子を見せるなど、朝長先生は手応えを語る。また、東京大など、入試で高度な論述力が求められる難関大を志望する生徒は、より発展的な内容を議論するなど、生徒たちは自分のレベルに合った活動を同じ時間内で展開している。

授業で使用するプリント(図2)は、朝長先生が作成したもので、ワークシート、確認問題、演習問題の3つで構成されている。確認問題は、授業を振り返ったり、教科書や資料集を見たりすれば答えを導けるものだ。授業中に確認問題に取り組むことで学んだ内容が定着し、「家で復習しなくても分かる」という声が生徒から聞かれるようになった。

高い授業力が求められるアクティブ・ラーニング

だが、アクティブ・ラーニング中心の授業への移行は、まだまだ試行錯誤の途にある。今は、生徒の様



長崎県立佐世保北高校
舟越裕
ふなこし・ひろし
進路指導主事。日本史担当。



長崎県立佐世保北高校
溝上貴稔
みぞがみ・たかとし
教科主任。日本史担当。

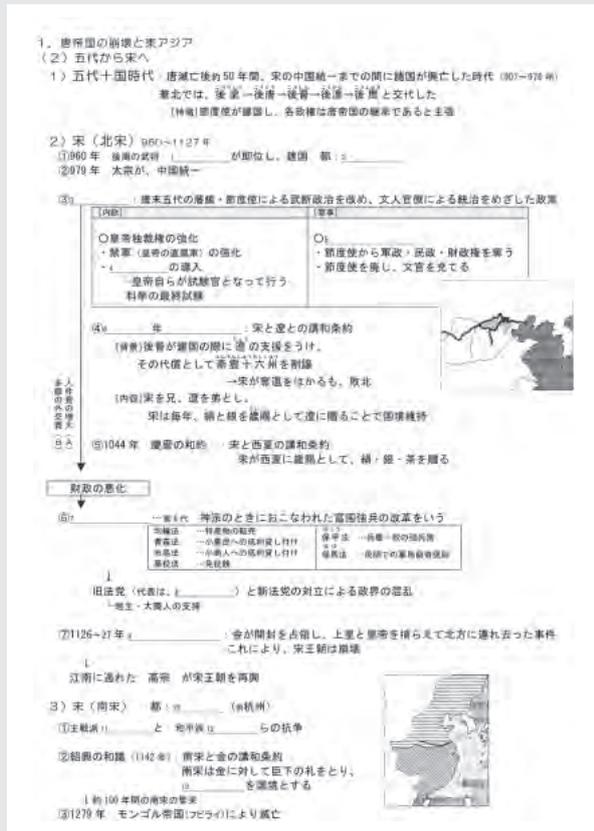


長崎県立佐世保北高校
朝長千恵
ともなが・ちえ
世界史担当。

長崎県立佐世保北高校

- ◎2003年度から全学年で早期補習を廃止し、毎日50分授業の7校時制を採用。「分かる授業の展開」に注力する。04年度から併設型中高一貫校となる。
- ◎全日制／普通科／共学
- ◎全校生徒数701人
- ◎2013年度入試合格実績(現役のみ)／国公立大は、東京大、京都大、大阪大、九州大、佐賀大、長崎大、鹿児島大などに151人が合格。私立大は、慶應義塾大、早稲田大、立命館大、福岡大などに延べ141人が合格

図2 朝長先生のプリント



プリントは、ワークシート、確認問題、演習問題の3つで構成されている(図はワークシート)。朝長先生がワークシートを使って講義を行った後、生徒はグループワークによる問題演習に取り組む。演習問題の最後には、授業を振り返るアンケートを行い、言語活動を含めた自己評価をする *学校資料をそのまま掲載

子を見て授業の流れも都度変えており、演習問題の解説を次の授業に回すこともあるという。何をどこまで、どうやって学ぶのか、授業を新しく設計している段階だ。

「アクティブ・ラーニングを行うためには、私の講義を20分間に凝縮しなければなりません。そのため、講義による説明を行うべきことと、プリントなどでの説明で理解できることを適切に選択することが重要です。その上で、講義による説明を行わないことはもろさずワークシート

に盛り込んだり、講義で説明したことが理解できていれば解ける問題を確認問題で出題したりと、講義、ワークシート、確認問題、そして演習問題が一貫性を持っているかという点に注意しながら、講義やプリントの内容を決めています。正直、従来のチョーク&トーク型の授業に比べると、準備は非常に大変ですが、教育効果も高いと感じていますし、自分自身の授業力の向上にもつながっていると自覚しています」(朝長先生)

言語活動を拡充した授業への転換

「朝長先生のようなアクティブ・ラーニング中心の授業を自分も行いたいと思いますが、さまざまな校務を行いながら、そこまでの準備の時間を捻出するのは難しいのが現状です。ただ、今まで通りの教え方では駄目だということも分かっています。社会的な事象に対しての興味・関心が低い最近の生徒に、『考えさせる場』を教師が意図的につくり、

気付くことの面白さを伝える必要性が増していると感じます」(舟越先生)

「チョーク&トークでずっと授業をしてきたので、最初はアクティブ・ラーニングに興味はありませんでした」と明かす舟越先生も、朝長先生の授業成果を踏まえて、今、授業研究に取り組んでいる。授業内容の精選がより問われるアクティブ・ラーニングだからこそ、高い授業力を持った経験豊かな教師の方が、アクティブ・ラーニング型の授業への移行はしやすいはずだというのが、同校の地理歴史科の認識だ。

朝長先生は新しい課題も見えてきたと話す。

「友だちと一緒に考えるよりも、先生の歴史の解釈などを聞きたいという生徒もいます。教師の教養を雑談の中に交えながら、歴史の流れを豊かに示すことも授業の醍醐味であることは事実です。そうした深い知的喜びを求める生徒の要望にどう応えていくかも課題です」(朝長先生)

「今後も研究授業を積み重ねて、地理歴史科全体で指導技術を向上させたいですね。研究授業には他教科の先生も参加し、さまざまなアドバイスをいただいています。また、アクティブ・ラーニングで興味を喚起された生徒が更に主体的に探究できるように、授業外の時間も含めて学びをサポートしていきたいと思っています」(溝上先生)

50分の授業を超えたトータルな学びのデザインが今、教師の共同作業によって進められている。